

テキサス・レンジャースと南テキサス

ダラスのユニオン・ターミナルに暴徒をグッと見据えたテキサスレンジャーの像が立っている。テキサスが生んだ女流彫刻家ウォルデン・トウチの作品は高さ八フィート、ブロンズ製、作品の題名は「今日（1960年）のテキサスレンジャー」三フィートの大理石の台には「One Riot, One Ranger」（一つの暴動、レンジャー一人）と刻まれている。この言葉ほどテキサス・レンジャースを端的に表した言葉はない。

テキサス・レンジャースはテキサスでは神格化され、伝説として語り継がれている。レンジャースは大胆不敵、超人的で驚くべき偉業を達成し、鎮圧には民兵の一团を必要とする暴動を、一人のレンジャーで対応した。とりわけメキシコ人の悪人は、その名前を聞いただけで怯んだ。レンジャースはリオグランデ沿いの無法状態や騒乱を鎮圧した功績をこのように称えられた。もっとも、暴動が発生したとき、レンジャー一人を派遣したのは、一人のレンジャーを見て暴徒が震え上がったからではない。人的な余裕が無く一人しか派遣できなかったのが実情であった。しかし、多分に誇張して宣伝されたことは否めないが、数々の功績を上げた勇敢でタフなレンジャーの物語は数多く残されている。¹⁰

レンジャースは特に国境沿いで名を馳せた。国境地帯では、レンジャーが訛って出来たリンチェ（rinche）と言う言葉は重要な意味を持っている。この言葉はレンジャースだけでなく、メキシコ人を殺す目的で武装した騎馬のアングロも指した。警官や自警団、あるいは国境警備隊なども、さらにピヤを捕獲するためにチワワに侵入したジェネラル・パーシングのアメリカ陸軍騎兵隊も、国境地帯に住むメキシコ人はリンチェと呼んだ。彼等の間では、正規のレンジャースは Rinches de Kinenia（キング牧場のレンジャース）と呼ばれ、テハノもメキシコ人も、彼らをキング牧場その他の牧畜事業家が雇っている用心棒だと思っていた。¹¹

国境地帯のテハノやメキシコ人がレンジャースをどのように思っていたかを示す警句や逸話に次のようなものがある。

1. テキサス・レンジャースは常に錆びた古い銃をサドルバッグに突っ込んでいた。これは武器を持たないメキシコ人を殺したときに使われるもので、殺した後に死体の傍に落とした。殺したのは自己防衛のためで、激しい打ち合いの末殺した、と報告した。

2. 武装したメキシコ人を殺すときは、レンジャーは寝込みを襲うか、メキシコ人の背中を撃った。

3. アメリカ軍がいなければ、レンジャースは国境に近寄ろうとしない。一度問題が発生するとレンジャースは逃げ、兵士の影に隠れた。

4. アメリカ陸軍の分遣隊がメキシコ人侵入者を追っていた。二人のレンジャースが彼等の先頭に立っていた。メキシコ人は藪の中へ隠れた。レンジャースは早足で追いかけてきて、その場所を指差すと引き下がり、先ず兵士に突入させた。

5. 二人のレンジャースが一人のメキシコ人馬泥棒を追っていた。二人は彼の足跡を発見し暫く跡を追っていたが、急に右の方へ直角に方向を転じて進んでいるうちに、農作業を終え家路を辿る六人のメキシコ人に出合った。二人はコルトを抜いて全員を撃ち殺した。彼等は近くの町へ行き、州都オースティンへ報告し、「馬泥棒を追跡中メキシコ人の一団と遭遇した。数で圧倒されながらも、激しい戦いの末、十二人を殺すことに成功し、我々には被害はなかった。残りの者は逃れ、恐らくリオグランデを渡ったものと思われる」。

このように、報告には抜けている点があることと、誇張はあるものの、大筋は真実であった。オースティンでは国境が安泰であることで満足した。恐れを知らず、激戦を生き抜いたレンジャースの評判は高まった。馬泥棒は、人の余り通らない道で、突然レンジャースに出会い、農夫と間違えられるのが怖くて、暫くはその場所を敬遠した。¹²

事実レンジャースは、彼等が追っている犯人とは全く関係のない無実のメキシコ人を殺した。レンジャース方式は「先ず撃ってから尋問する」であり、多くの者が間違えて射殺された。しかし、レンジャースの手によって殺害されたメキシコ人の大部分は、故意に、計画的に殺された。国境の歴史上、レンジャースによって共犯者に仕立て上げられたメキシコ人の大量虐殺は、二度発生した。1859年のコルティナの反乱と、1915年のアニセト・ピサニャが加わったサンディエゴ計画による攻撃が繰り返された時であった。

レンジャースのやり方は、国境の無法状態を鎮圧する手段として正当化された。当然反対意見がある。国境地帯の住民の多くは、この地域を沈静化させたのはアメリカ軍や地方の警官、保安官などの法の執行官であり、レンジャースの行動は静めるどころか、動乱をさらに煽り立てた。リオグランデ沿いでは長年に亘り、レンジャースは法によって取り締まる事はしないで、逆に無法状態を創り出す元凶であった。国境への襲撃隊を打ち砕いたのは軍で、盗人や密輸業者を取り締まったのは地方の治安組織であった。古くから土地を持っていたテハノは、身の危険のみならず、土地の所有権を奪われる恐れがあった。無法という法律を執行したのはテキサス・レンジャースであった。一攫千金を夢見て国境地帯へやって来たアングロに対して、サービスを提供したのは軍や地方の保安官ではなく、レンジャースであった。それがため、巨額の財産を手にした者の観点からは、テキサス・レンジャースは国境地帯に平和をもたらしたとして、絶賛されたのである。

レンジャースや、彼等のやり方を真似た者たちが、国境における異文化の衝突を一層激しいものにした事は疑う余地はない。この地域を効果的に沈静化するためには、リオグランデ北岸の人々が、アメリカ合衆国に同化されることが絶対に必要であった。レンジャースのとった行動はこれを妨害した。彼等はアメリカ政府に対する敵愾心を国境のテハノやメキシコ人に植え付けた。この頃、社会情勢の変化による重圧のために、国境地帯の社会組織が崩壊に向かい始めたとき、レンジャースのために、人々は以前にも増して結束を固める事になった。恐怖は、目立たない住民を萎縮させたが、平和を愛し、有益な市民であったはずの意気盛んな若者を盗賊や襲撃隊員にした。反抗した若者は国境の民の英雄とし

て、コリードで歌い継がれている。13

テキサス・レンジャースの歴史は古い。テキサスがまだメキシコに属していた1823年、スティーヴン・オースティンがアングロの移住者をインディアンから護るために十人の警備隊員を雇ったのがその起源である。1835年11月25日、アラモ玉砕の前年、レンジャースの形が出来上がった。テキサス革命政府は五十六名からなる特殊部隊三部隊を組織し、少佐に統括させて国境の警護にあたらせた。1846-48年の米墨戦争で、レンジャースはボランティアとして参戦した。占領中のメキシコ市では目に余る残虐行為を繰り返したため、アメリカ軍ジェネラル・ザカリー・テイラーは彼らを逮捕して投獄する、と脅さねばならなかった。レンジャースにしてみれば、戦争はお金を貰ってメキシコ人を殺す、又とない機会であった。メキシコ戦争後、テキサス政府はレンジャースを連邦政府の管轄下に置き、連邦政府の費用で、全てのメキシコ人をリオグランデに、全てのインディアンをレッドリヴァーに落すことを要求した。連邦政府は断った。14

1859年、フアン・コルティナの反乱によりリオグランデ・シティから河口のブラウンズヴィルにかけての帯は、ゲリラ攻撃と掠奪により廃墟した。テキサス州知事サム・ヒューストンはブキャナン大統領に援助を求めた。アメリカ軍とテキサス・レンジャースはコルティナをメキシコに追いやった。15

リンカーン大統領就任後1861年3月、テキサス議会は百九対二で南軍に加わる決議をした。テリーのテキサス・レンジャースと呼ばれた一部隊は南軍と共に戦った。テハノは一致した行動はせず、州の方針に従って三千五百人のテハノ部隊は南軍のために戦う一方、北軍に味方する者はアングロの綿花、牛、馬その他の財産を襲った。南北戦争終了後九年間テキサス・レンジャースは姿を消した。

1874年、テキサス議会は二つの準軍事部隊を創設した。一つはジョン・B・ジョーンズ准将の率いるテキサス・レンジャース辺境防衛大隊で、州知事が総務局長を介して統括した。大隊の大きさは、それぞれ七十五人、AからFまでの六個中隊で、総員四百五十名であった。各中隊は大尉により統率され、補佐として中尉一人、少尉一人、軍曹一人がついた。大隊の主要任務は州西部辺境地でインディアンと戦うことであった。もう一つは元州警察大尉で、南北戦争の経験を持つLHマックネリー大尉の特殊部隊であった。リオグランデ沿いの盗賊取締りが部隊の任務で、やり方が冷酷であるとの批判を受けながら、目を見張るような成果を上げた。彼は家畜泥棒や山賊を根絶やしにしたばかりでなく、三十人の男を連れてメキシコに攻め入り、家畜泥棒の本拠地と言われた二つの牧場を襲い、キング牧場から盗まれた牛五百頭を取り戻した。16

サンディエゴ計画による反乱の前に発生した特記すべき最後の暴動は、1891年に発生したカタリノ・ガルサの反乱である。メキシコ政府の転覆を狙って始まったこの暴動は、アメリカにおけるメキシコ人弾圧への抗議運動へと発展した。ガルサは1859年、マタ

モロスで生まれ、十八歳のときにブラウズヴィルへ移った。彼は新聞記者になり、南テキサス全域で共済組合活動を行っていた。ガルサはメキシコとアメリカで虐げられている人々のために立ち上がった。彼はアングロの人種差別と、私利私欲のための政治がメキシコ人を窮乏に追いやっている原因であると、痛烈に批判した。彼は独裁者ポルフィリオ・ディアスが一般市民の政治的権利を否定している事を非難した。1859年暴動の指導者ファン・コルティナと同じように、ガルサもメキシコの伝統的な自由主義者であった。彼は経済的な不満や階級闘争ではなくて、個人の自由と平等など政治的な自由を訴えた。ガルサは多くの敵を作った。土地の権力者に反抗した多くのテハノのように、レンジャースに執拗につきまといわれることになった。

ガルサは米国税関吏がメキシコ人を刑務所に連行する途中、殺害したことを報道した。彼は列車の中で名誉毀損の罪でレンジャースに逮捕された。翌月ガルサが税関吏により撃たれる事件がおきた。四百人ほどのメキシコ人やテハノがリオグランデ・シティーの米軍基地の前で抗議集会を開いてガルサを襲った容疑者の逮捕を要求した。それから三年後ガルサは数人の男たちを連れて、ポルフィリオ・ディアスに対して謀反を宣言し、愛国心に富むメキシコ人に決起を促した。翌年ガルサの部隊はメキシコとアメリカの軍隊と衝突した。彼はリオグランデの両岸で幅広い支持を得ていたが、軍隊やレンジャースの追っ手を逃れ、ヒューストンから南米のコロンビアに渡り、そこで解放軍のために戦って戦死した。

17

アメリカ南西部のメキシコ人とテハノはアングロによる虐待に対して憤りを抱いていた。中でも南テキサスは特に大規模な暴動に発展する要素が多分にあった。人口の殆どはメキシコ系であった。彼等の多くはアングロが持ち込んだ経済システムに同調する一方、ある者は武器を取って抵抗しようとしていた。数千のテハノは土地所有者であった。一方、土地を持たない者、取り上げられた者は暴動に走った。中にはコルティナやガルサのように比較的裕福なものもアングロに抵抗した。暴動に駆り立てられた多くの者は河を渡り簡単にメキシコへ逃れることが出来た。

強制的にアメリカに編入させられてから五十年後、南テキサスのテハノはより貧しくなり、片隅に追いやられ、彼等の祖父が持っていた土地は減っていた。世紀の変わり目、南テキサスでの彼等の生活は1848年と比較して殆ど違いはなかった。新聞、商行為、政治活動、法廷での裁判など全てがスペイン語であった。メキシコのペソはドルと同じように流通していた。単純労働者は皆メキシコ系であったように、商人、農場主、政治家、保安官もメキシコ系であった。1900年人口の九十二%はメキシコ系で、僅か千人のアングロが住んでいるだけであった。南テキサスのテハノやメキシコ人は、黒人のように隔離されてはいなく、全ての法律で保護されていた。彼らは「メキシコ人お断り」の掲示を目にすることも無く、レストランの正面玄関から入り、座ることが出来た。新しい世紀に入り、彼等が数世紀の長い間培ってきたもの全てが危険に曝されることになった。遠隔地で

あったが故にテハノとアングロの関係は、他の米国本土と異なる特異な形態で発展してきた。しかし間もなくアングロ集団の重圧と、サンディエゴ計画への反動のために、有無を言わさぬ残忍な差別社会へと崩壊していった。その全ての責任は鉄道の発展にあった。1904年ブラウンズヴィルまでの鉄道が完成し、7月4日セントルイス・ブラウンズヴィル・アンド・メキシコ鉄道の旅客列車が到着し、この地域は初めてアメリカの一部となった。¹⁸

1901年7月8日、知事は議会の信任を得て新しいレンジャース部隊を増やした。テキサス州レンジャース部隊の目的は国境地帯における略奪、泥棒の取締り及び、法と秩序の回復であった。レンジャースは騎兵四個中隊からなり、各部隊の構成は大尉一人、軍曹二人、兵士二十人であった。加えて主計大尉が全体をカバーした。レンジャースの歴史で見のがすことの出来ない重要な点は、部隊は州知事により私物化されていた事である。大尉は知事が随意に任命し、途中で罷免されない限り任期は二年であった。月給は大尉が百ドル、軍曹五十ドル、兵士は四十ドル、レンジャーは通常未婚で二年のボランティアであった。士官から兵卒まで馬、馬具一式および衣服を自費調達した。もし交戦中に馬が殺された場合は市場価格で賠償を受けた。支給されたカービン銃、ピストルそれぞれ一丁ずつは州が準備したが、実費は最初の給料から天引きされた。食料、キャンプ用具、弾薬及び飼葉は部隊から支給を受けた。何らかの理由で割り当てられた食料が得られなかった場合には一日当り一ドル五十セントを超えない範囲で現金が支給された。レンジャースは鉄道で移動し、旅費は州が支払った。彼らは総務局長から電報で指示を受けて行動した。馬は列車に同乗するか、現地で調達した。1901年のレンジャー法で特筆すべきは、将校から兵卒に至る全てのレンジャーに、それまでは許されていなかった逮捕権が与えられたことである。何処の郡でも、レンジャーはシェリフと同じ権限を与えられた。¹⁹

10. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P1
11. Americó Paredes, "With His Pistol in His Hand", University of Texas Press, P8
12. Ibid. P9
13. Ibid. P10
14. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P15
15. Ruth Griffin Spence, "The Nickel Plated Highway to Hell", P6
16. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P16
17. Benjamin Heber Johnson, "Revolution in Texas, How a Forgotten Rebellion and its Bloody Suppression Turned Mexicans into Americans", Yale University Press, 2003 P26

18. Ibid. P27

19. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution",
University of New Mexico Press, 2002, P18